

次に、基本編 8 番の「はい」に○がついた場合にチェックをする詳細 B の「うつ」状態を疑うサイン項目で網掛け項目の○数については、表 2-1、表 2-2 に示す。地域別では、2 個以上該当者の割合が高かったのは、S 市 22 人と都市近郊 5 人の順であったうつ 0 個の人数は、K 市 3 人、都市近郊 2 人、S 市および農村部各 1 人であった。また、所属地域における見守り専門職の有無別では、2 個以上「うつ」状態を疑うサイン項目の該当者数は、見守り専門職なしの群 27 人が見守り専門職ありの群に比べて多かった。

詳細編 C の認知症を疑うサイン項目の○数については、表 3-1、表 3-2 に示す。○数が 0～3 個の人数は、地域別では、S 市 49 人が最も多く、次いで都市近郊の 13 人であった。○が 4 個以上の人数は、S 市 16 人で最も多く、次いで K 市 4 人であった。また、所属地域における見守り専門職の有無別では、○の数が 4 個以上の人数は、見守り専門職なしの群 16 人で、見守り専門職ありの群 5 人に比べて多かった。

チェックシート基本編記入後、「あなたはどのように対応したいと考えますか」との項目については、地域別では、「普段どおり、あいさつや声かけ」は S 市で有意に低く、無回答の割合が高かった(表 4-1)。

所属地域の見守り専門職の有無別では、見守り専門職ありの群で有意に「普段どおり、挨拶や声かけ」が多かった(表 4-2)。

表 4-1 地域別 今後の対応(n=334)

項 目	人数(%)				P値
	K市(n=111)	S市(n=97)	農村部(n=44)	都市近郊(n=82)	
普段どおり、あいさつや声かけ	67(60.4)	13(13.4) *	26(59.1)	39(47.6)	<0.001
訪問・電話	27(24.3)	31(32.0)	10(22.7)	26(31.7)	
地域包括へ相談	3(2.7)	4(4.1)	2(4.5)	0(0.0)	
その他	1(0.9)	3(3.1)	0(0.0)	0(0.0)	
無回答	13(11.7)	46(47.4)	6(13.7)	17(20.7)	
計	111(100.0)	97(100.0)	44(100.0)	82(100.0)	

表 4-2 所属地域における見守り専門職の有無別 今後の対応 (n=334)

項 目	人数(%)		P値
	見守り専門職あり(n=150)	見守り専門職なし(n=184)	
普段どおり、あいさつや声かけ	89(59.3)	56(30.4) *	<0.001
訪問・電話	36(24.0)	31(32.0)	
地域包括へ相談	3(2.0)	4(4.1)	
その他	1(0.7)	3(3.1)	
無回答	21(14.0)	46(47.4)	
計	150(100.0)	184(100.0)	

表 5 基本編各 12 項目の「はい」に○がついた人における「今後の対応」(n=247)

項 目	人数(人)				計
	挨拶や声かけ	訪問・電話	地域包括へ相談	その他	
ポストの郵便・新聞、雨戸閉まりっぱなし	3	7	1	1	12
家や家周囲の散らかり	6	7	4	0	17
家の明かりがつかない	1	2	1	0	4
通院している様子が無い	1	5	3	0	9
どなり声、泣き声、不自然な傷・あざあり	0	0	4	1	5
最近姿を見ない、物音がしない	3	7	1	0	11
不審者が出入り	0	0	0	0	0
無気力又は無表情、意欲・生気なし	6	10	3	0	19
近所とのトラブルが多くなった	1	3	1	0	5
服装が以前より乱れている	2	2	4	0	8
火の不始末が増えている	1	1	0	0	2
会話が通じにくい	12	12	3	2	29

今後の対応について、基本編 12 項目の「はい」に○がついた人における今後の対応を表 5 に示した。n 数が少ないため、全該当者を対象として表を作成した。

基本編 12 項目の「はい」に○がついた人の今後の対応をみると、「普段どおり、挨拶や声かけ」では、「会話が通じにくい」12 人、「無気力又は無表情、意欲・生気なし」6 人、「家や家周囲の散らかり」6 人であった。「訪問・電話」では、「会話が通じにくい」12 人、「無気力又は無表情、意欲・生気なし」10 人であった。「地域包括へ相談」では、「家や周囲の散らかり」4 人、「どなり声、泣き声、不自然な傷・あざあり」4 人、「服装が以前より乱れている」4 人であった。

4) 詳細編チェック項目

(1) 詳細編チェック項目

詳細編 A は、基本編 1～12 に 1 つでも「はい」に○がついた場合にチェックを行う。見守りチェックシート詳細編 A のチェック項目の回答結果は、表 4-1,4-2 のとおりである。地域別で「はい」の○数が多かった項目は、「自分で家内を移動できない」、「転倒や事故にあった」、「買物ができない」、「家事が出来ていない」、「必要な福祉サービスを中断・利用していない」、「家族との接触少ない(昼間独居、同居家族と必要最低限の会話)」、「眠れない、不安や心配事などがありますか」であった。その他、「食事が摂れていない」、「同居でも毎日本人は弁当購入」、「最近頼りになる家族の死(2 ヶ月間)に遭遇」の項目の「はい」に○がついた人がいたのは S 市のみであった(表 6-1)。

所属地域の見守り専門職の有無別では、見守り専門職なしの群で「食事が摂れていない」、「転倒や事故などにあつた」「家事ができていない」、「必要な福祉サービスを中断・利用していない」、「家族との接触が少ない」といった項目の「はい」に○がついた人数が多かった(表 6-2)。詳細編 A チェックシート案でうつ状態のスクリーニング項目である 15 番の「はい」に○がついている人については、S 市で 16 人、都市近郊で 3 人であった。

所属地域における見守り専門職の有無別では、見守り専門職無しの群で、詳細 A の 15 番の「はい」に○がついている人数が多く、詳細編 B の網掛け部分の○数については、2 個以上○のつく

地域包括支援センターへの相談対応が多かった。

表 6-1 地区別詳細編 A 観察・会話によるチェック項目の回答結果

項 目	人数			
	K市(n=6)	S市(n=60)	農村部(n=6)	都市近郊(n=28)
自分で家内を移動できない(杖、車椅子を含む)	1	9	0	0
転倒や事故などにあった	1	25	2	5
閉じこもり(外出週1回以下)	3	13	2	6
買物ができない	4	20	2	6
最近頼りになる家族の死(2ヶ月間)に遭遇	0	2	0	0
最近転居、長期入院から退院した	0	5	0	1
同居でも毎日本人は弁当購入	0	3	0	0
屋外に長時間一人にいる	0	4	0	3
食事が摂れていない	0	9	0	0
家事が出来てない	2	20	2	2
経済的に苦しい (収入なし、家族が失職・金銭搾取等されている)	1	5	1	3
必要な福祉サービスを中断・利用していない	4	17	1	3
家族との接触少ない (昼間独居、同居家族と必要最低限の会話)	4	19	5	4
正月3が日は誰とも過ごしていない、一人だった	2	9	0	8
眠れない、不安や心配事などがありますか	1	16	1	3

表 6-2 所属地域における見守り専門職の有無別詳細編 A 観察・会話によるチェック項目の回答結果

項 目	人数	
	見守り専門職あり (n=23)	見守り専門職なし (n=67)
自分で家内を移動できない(杖、車椅子を含む)	1	9
転倒や事故などにあった	5	28
閉じこもり(外出週1回以下)	7	10
買物ができない	9	23
最近頼りになる家族の死(2ヶ月間)に遭遇	0	2
最近転居、長期入院から退院した	1	5
同居でも毎日本人は弁当購入	0	3
屋外に長時間一人にいる	3	4
食事が摂れていない	0	9
家事が出来てない	4	22
経済的に苦しい (収入なし、家族が失職・金銭搾取等されている)	3	7
必要な福祉サービスを中断・利用していない	6	19
家族との接触少ない (昼間独居、同居家族と必要最低限の会話)	6	27
正月3が日は誰とも過ごしていない、一人だった	7	12
眠れない、不安や心配事などがありますか	3	18

詳

細編 B のチェック項目の回答結果は、特定健康診査チェック項目より抜粋したうつ状態をチェックする項目で、網掛け部分に○がついている数で判断、対応となっている(0個⇒ふだんどおりあいさつや声をかける、1個⇒訪問したり、電話をかけて様子を見る、2個以上⇒地域包括支援センターに相談)。地域別では、○がついているのは、いずれもチェックする必要のある項目が多かった(表 7-1)。

所属地域における見守り専門職の有無別では、見守り専門職なしの群でチェックする必要がある項目に○がつく人が多かった(表 7-2)。

表 7-1 地域別詳細編 B チェック項目の回答結果

項 目	網掛け部分の該当者数(人)			
	K市(n=3)	S市(n=26)	農村部(n=1)	都市近郊(n=7)
毎日の生活が充実していますか：「いいえ」の該当者	3	19	1	3
これまで楽しんでやれていたことが今も楽しんでできていますか：「いいえ」の該当者	3	21	1	4
以前は楽にできていたことが、今ではおっくに感じられますか：「はい」の該当者	3	18	1	5
自分は役に立つ人間だと考えることができますか：「いいえ」の該当者	2	14	0	4
わけもなく疲れたような感じがしますか：「はい」の該当者	2	16	0	4

表 7-2 所属地域における見守り専門職の有無別 地域別詳細編 B チェック項目の回答結果

項 目	網掛けの該当者数(人)	
	見守り専門職あり (n=10)	見守り専門職なし (n=33)
毎日の生活が充実していますか：「いいえ」の該当者	6	20
これまで楽しんでやれていたことが今も楽しんでできていますか：「いいえ」の該当者	7	22
以前は楽にできていたことが、今ではおっくに感じられますか：「はい」の該当者	8	19
自分は役に立つ人間だと考えることができますか：「いいえ」の該当者	6	14
わけもなく疲れたような感じがしますか：「はい」の該当者	6	16

詳細編 C は、基本編の 7～12 番の「はい」に 1 つでも○がついた場合にチェックを行う。詳細編 C に関しては、認知症が疑われるサインに関する項目で、15 項目となっている。詳細編 C15 項目のうち、「はい」の○の数が 0～3 人の人数は、S 市 49 人が最も多く、次いで都市近郊 13 人で多かった。「はい」の○数が 4 人以上の人数は、S 市 16 人と最も多く、次いで K 市 4 人であった。

詳細 C 項目の中で、○の人数が多かった項目は、「夜中に平気で外出・活動する、近隣のチャイムをよく鳴らす」、「同じことを何度も言ったり、聞いたりする、話したばかりの内容を忘れる」、「最近の出来事が思い出せない」、「鍵などの大事なものの置き忘れ、しまい忘れが目立つ」、「服装や髪の手入れにかまわなくなった」、「薬の飲み忘れ、飲み過ぎが目立つ」といった項目であった。地域別では、全ての項目で S 市における○の人数が多かった。

見守り専門職の有無別では、全ての項目で見守り専門職なしの群で○の人数が多かった。

表 8-1 地域別 詳細編 C チェック項目の回答結果

項 目	人数			
	K市(n=6)	S市(n=51)	農村部(n=3)	都市近郊(n=14)
服装や髪の手入れにかまわなくなった	3	15	1	3
よく道に迷い帰宅できない、歩き回り不審がられる	1	2	0	0
鍵などの大事なものの置き忘れ、しまい忘れが目立つ	1	16	0	0
日時をよく間違う、約束を全く忘れている ゴミの日をよく間違う	4	13	0	1
計算が出来ない(財布が小銭で一杯、札のみ支払う)	1	7	0	0
同じことを何度も言ったり、聞いたりする 話したばかりの内容を忘れる	4	22	1	3
通帳・財布などを盗まれたと騒ぐ	0	5	0	0
夜中に平気で外出・活動する 近隣のチャイムをよく鳴らす	4	45	3	7
ゴミの出し方が分からない ゴミの口がきっちり結べない	1	4	0	2
入浴を極端に嫌がる・身体の汚れが目立つ	1	5	1	0
同じ食品・品物を何度も買っている	0	5	0	0
怒りっぽくなった	0	7	0	0
薬の飲み忘れ、飲み過ぎが目立つ	1	13	0	0
腐ったものと新鮮なものとの区別がつかない	0	7	0	0
最近の出来事が思い出せない	2	16	0	3

表 8-2 所属地域における見守り専門職の有無別 詳細編 C チェック項目の回答結果

項 目	人数	
	見守り専門職あり (n=14)	見守り専門職なし (n=45)
服装や髪の手入れにかまわなくなった	6	16
よく道に迷い帰宅できない、歩き回り不審がられる	1	2
鍵などの大事なものの置き忘れ、しまい忘れが目立つ	1	16
日時をよく間違う、約束を全く忘れている、 ゴミの日をよく間違う	5	13
計算が出来ない(財布が小銭で一杯、札のみ支払う)	1	6
同じことを何度も言ったり、聞いたりする 話したばかりの内容を忘れる	7	23
通帳・財布などを盗まれたと騒ぐ	0	5
夜中に平気で外出・活動する 近隣のチャイムをよく鳴らす	8	51
ゴミの出し方が分からない ゴミの口がきっちり結べない	3	4
入浴を極端に嫌がる・身体の汚れが目立つ	1	6
同じ食品・品物を何度も買っている	0	5
怒りっぽくなった	0	6
薬の飲み忘れ、飲み過ぎが目立つ	1	13
腐ったものと新鮮なものとの区別がつかない	0	6
最近の出来事が思い出せない	5	16

5) 測定指標の検討

見守りチェックシート(案)作成にあたっては、第2章1.で紹介しているが、本研究代表者、分担研究者らで作成したものであり、回答は「はい」、「いいえ」、「わからない」の3件法で、各項目に0、1、2点を付与している。

見守りチェックシート(案)の基本編12項目、詳細編A15項目、詳細編B5項目、詳細編C15項目について、探索的因子分析および確認的因子分析で因子構造の検討を行った。探索的因子分析では、計算エラーの少ないとされる主因子法による因子分析を行った。基本編12項目について、1回目の因子分析の結果、因子数は、固有値の変化から、2因子構造が妥当であると考えられた。そのため、2因子を仮定して主因子法・プロマックス回転により因子分析を行った。2因子で項目の全分散を説明する割合は、57.20%であった。項目選定は、共通性における因子負荷量0.3以上を基準に項目選定を行った結果、12項目中、2番「家や家の周囲が異常に散らかっている」、7番「不審者が出入りしている」、9番「近所の人とのトラブルが多くなった」、11番「ガス、暖房の消し忘れなど火の不始末が増えている」の4項目を削除した。プロマックス回転後の因子パターンについては表9-1に、因子相関行列については、表9-2に示す。

第1因子は、本人の状況を示す内容と考えられた。項目は、「無気力又は無表情、意欲・生気なし」、「会話が通じにくい」、「服装が以前より乱れている」、「通院している様子がない」、「どなり声、泣き声、不自然な傷・あざあり」の5項目であった。第2因子は、見守り対象者の家の様子を示す内容と考えられ、項目は、「最近姿を見ない、物音がしない」、「ポストの郵便・新聞がたまっている、雨戸が閉まりっぱなし」、「家の明かりがつかない」の3項目であった。基本編8項目全体のCronbach's α 係数は、基本編で0.799であった。因子間の相関は、第1因子と第2因子間の相関は、0.623で、中程度の相関が認められた。第1因子、第2因子のCronbach's α 係数は、0.702から0.767であった。次に、基本編2因子の構造を確認するために、確認的因子分析を行った。その結果、CFI(比較適合度指標:comparative fit index)は、0.965、RMSEA(平均二乗誤差平方根:root mean square of approximation)0.061、AIC(赤池情報量基準:akaike's information criterion)92.215であった。CFIは1に近いほど適合度がよいモデルで、RMSEAは、0.08以下であれば適合度は高いとされる。

AICは、小さいほど適合度が高いとされる。基本編のCFI、RMSEAから、モデル適合は良いと考えられた。

表9-1 基本編の項目における因子分析 因子構造と信頼性係数(プロマックス回転後)(n=304)

項目	因子		信頼性係数
	第1因子	第2因子	
8 無気力又は無表情、意欲・生気なし	.758	.004	$\alpha=0.767$
12 会話が通じにくい	.719	-.140	
10 服装が以前より乱れている	.624	.116	
4 通院している様子がない	.570	.080	
5 どなり声、泣き声、不自然な傷・あざあり	.373	.245	
6 最近姿を見ない、物音がしない	-.070	.778	$\alpha=0.702$
1 ポストの郵便・新聞、雨戸閉まりっぱなし	-.001	.683	
3 家の明かりがつかない	.091	.482	

表 9-2 基本編の因子相関行列

因子	第1因子	第2因子
第1因子	1.000	.623
第2因子	.623	1.000

詳細編 A15 項目については、因子分析の結果、因子負荷量が 0.3 未満の 1 項目、11 番「経済的に苦しい(収入なし、家族が失職・金銭搾取等されている)」を削除して、再度因子分析を行った。その結果、3 因子構造が妥当である

と考えられた。そのため、3 因子を仮定して主因子法・プロマックス回転により因子分析を行った。回転前の 3 因子で全分散を説明する割合は、65.76%であった。プロマックス回転後の因子パターンについては表 10-1 に、因子相関行列については、表 10-2 に示す。第 1 因子から第 3 因子の信頼性係数は、0.779 から 0.859 であった。詳細編 A14 項目の Cronbach's α 係数は、0.893 であった。第 1 因子は、見守り対象者自身の生活状況を示す内容で、「食事が摂れていない」、「転倒や事故などにあった」、「自分で家内を移動できない(杖、車椅子を含む)」、「同居でも毎日本人は弁当購入」、「眠れない、不安や心配事などがありますか」の 5 項目であった。第 2 因子は、主に見守り対象者と家族の関係を示す内容と考えられ、「正月 3 が日は誰とも過ごしていない、一人だった」、「家族との接触少ない」、「必要な福祉サービスを中断・利用していない」、「最近頼りになる家族の死(2 ヶ月間)に遭遇」、「家事ができていない」の 5 項目であった。第 3 因子は、見守り対象者の活動状況を示す内容と考えられた。項目としては、「屋外に長時間一人である」、「買物ができない」、「最近転居、長期入院から退院した」、「閉じこもり(外出週 1 回以下)」の 4 項目であった。因子相関行列は、第 1 因子と第 2 因子間の相関は 0.628、第 1 因子と第 3 因子間の相関は 0.588、第 2 因子と第 3 因子間の相関は、0.506 で中程度の相関が認められた。詳細編 A の CFI は、0.888、RMSEA0.05、AIC226.68 とモデル適合度は良いと考えられる。

詳細編 B5 項目については、生活機能評価等で使用されている「うつ」状態をチェックする 5 項目とした。1 回目の因子分析の結果、因子数は、固有値の変化から、2 因子構造が妥当であると考えられた。そのため、2 因子を仮定して主因子法・プロマックス回転により因子分析を行った。回転前の 2 因子で 5 項目の全分散を説明する割合は、74.67%であった。プロマックス回転後の因子パターンについては表 11-1 に、因子相関行列については、表 11-2 に示す。

第 1 因子は、見守り対象者の生活上の興味から遠ざかる内容と考えられた。項目は、「毎日の生活が充実していますか」、「これまで楽しんでやれていたことが今も楽しんでできていますか」、「以前は楽にできていたことが、今ではおっくうに感じられますか」の 3 項目であった。第 2 因子は、見守り対象者の意欲に関する内容と考えられた。項目は、「わけもなく疲れたような感じがしますか」、「自分は役に立つ人間だと考えることができますか」の 2 項目であった。第 1 因子、第 2 因子の Cronbach's α 係数は、0.849 と 0.665 であった。因子間行列は、第 1 因子と第 2 因子間で -0.227 と、相関は弱いと考えられた。しかし、今回の調査では、n 数が 31 と少ないことからデータを増やす必要があると考える。

表 10-1 詳細編 A の項目における因子分析 因子構造と信頼性係数(プロマックス回転後)(n=97)

項 目	因子			信頼性係数
	第1因子	第2因子	第3因子	
9 食事が摂れていない	.837	-.115	.105	$\alpha=0.859$
2 転倒や事故などにあった	.788	.048	.017	
1 自分で家内を移動できない(杖、車椅子を含む)	.686	-.010	.007	
7 同居でも毎日本人は弁当購入	.589	.163	.192	
15 眠れない、不安や心配事などがありますか	.576	.194	-.115	
14 正月3が日は誰とも過ごしていない、一人だった	.006	.854	-.124	$\alpha=0.779$
13 家族との接触少ない (昼間独居、同居家族と必要最低限の会話)	.133	.826	-.201	
12 必要な福祉サービスを中断・利用していない	-.028	.613	.178	
5 最近頼りになる家族の死(2ヶ月間)に遭遇	-.022	.373	.353	
10 家事が出来てない	.330	.354	.046	
8 屋外に長時間一人でいる	-.042	-.157	.940	$\alpha=0.792$
4 買物ができない	.165	-.149	.723	
6 最近転居、長期入院から退院した	-.157	.474	.612	
3 閉じこもり(外出週1回以下)	.107	.044	.563	

表 10-2 詳細編 A の因子間行列

因子	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子	1.000	.628	.588
第2因子	.628	1.000	.506
第3因子	.588	.506	1.000

表 11-1 詳細編 B の項目における因子分析 因子構造と信頼性係数(プロマックス回転後)(n=31)

項 目	因子		信頼性係数
	第1因子	第2因子	
2 毎日の生活が充実していますか :「いいえ」の該当者	.946	.029	$\alpha=0.849$
1 これまで楽しんでやれていたことが今も楽しんでできていますか: 「いいえ」の該当者	.780	-.042	
4 以前は楽にできていたことが、今ではおっくに感じられますか : 「はい」の該当者	.730	.025	
3 自分は役に立つ人間だと考えることができますか: 「いいえ」の該当者	.128	.661	$\alpha=0.665$
5 わけもなく疲れたような感じがしますか:「はい」の該当者	-.153	.605	

表 11-2 詳細編 B の因子間行列

因子	第1因子	第2因子
第1因子	1.000	-.227
第2因子	-.227	1.000

詳細編 C15 項目については、因子分析の結果、因子数は、固有値の変化から、3 因子構造が妥当であると考えられた。項目数の選定は、因子負荷量 0.3 以上を基準とした結果、6 番「同じことを何度も言ったり、聞いたりする、話したばかりの内容を忘れる」、12 番「怒りっぽくなった」の 2 項目を削除して再度因子分析を行った。分析は、3 因子を仮定した主因子法・プロマックス回転により因子分析を行った。3 因子で項目の全分散を説明する割合は、60.97%であった。プロマックス回転後の因子パターンについては表 12-1 に、因子相関行列については、表 12-2 に示す。第 1 因子は、主に想起に関する内容を示すと考えられる。項目は、「日時をよく間違う、約束を全く忘れている、ゴミの日をよく間違う」、「最近の出来事が思い出せない」、「鍵などの大事なものの置き忘れ、しまい忘れが目立つ」、「同じ食品、品物を何度も買っている」、「薬の飲み忘れ、飲み過ぎが目立つ」の 5 項目であった。第 2 因子は、主に見当識に関する内容と考えられる。項目は、「夜中に平気で外出・活動する、近隣のチャイムをよく鳴らす」、「ゴミの出し方が分からない、ゴミの口がきっちり結べない」、「よく道に迷い帰宅できない、歩き回り不審がられる」、「腐ったものと新鮮なものとの区別がつかない」、「通帳・財布などを盗まれたと騒ぐ」、の 5 項目であった。第 3 因子は、主に今までできていたことができなくなる「入浴を極端に嫌がる・身体の汚れが目立つ」、「計算ができない(財布が小銭で一杯、札のみ支払う)」、「服装や髪の手入れにかまわなくなつた」、の 3 項目であった。詳細編 C 全体の Cronbach's α 係数は、0.864 であった。第 1 因子から第 2 因子の Cronbach's α 係数は、0.686 から 0.786 であった。因子相関行列は、因子間の相関は、第 1 因子と第 2 因子間は 0.539、第 1 因子と第 3 因子間で 0.494、第 2 因子と第 3 因子間で 0.591 と中程度の相関が認められた。

詳細編 C についての適合度指標は、CFI は 1.000、RMSEA は 0.00、AIC は 144.183 であったことから、モデル適合は良好と考えられた。

表 12-1 詳細編 C の項目における因子分析 因子構造と信頼性係数(プロマックス回転後)(n=72)

項目	因子			信頼性係数
	第1因子	第2因子	第3因子	
4 日時をよく間違ふ、約束を全く忘れて、ゴミの日をよく間違ふ	.889	.063	-.057	$\alpha=0.786$
15 最近の出来事が思い出せない	.772	-.178	.153	
3 鍵などの大事なものの置き忘れ、しまい忘れが目立つ	.735	-.051	-.008	
11 同じ食品・品物を何度も買っている	.413	.195	.030	
13 薬の飲み忘れ、飲み過ぎが目立つ	.410	.230	-.156	
8 夜中に平気で外出・活動する 近隣のチャイムをよく鳴らす	-.169	.799	-.041	$\alpha=0.782$
9 ゴミの出し方が分からない ゴミの口がきっちり結べない	.148	.620	-.050	
2 よく道に迷い帰宅できない、歩き回り不審がられる	-.036	.618	.257	
14 腐ったものと新鮮なものとの区別がつかない	.170	.602	-.004	
7 通帳・財布などを盗まれたと騒ぐ	.089	.552	.142	
10 入浴を極端に嫌がる・身体の汚れが目立つ	-.083	.005	.951	$\alpha=0.686$
5 計算が出来ない(財布が小銭で一杯、札のみ支払う)	.224	-.046	.560	
1 服装や髪の手入れにかまわなくなった	-.044	.090	.505	

表 12-2 詳細編 C の因子間行列

因子	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子	1.000	.539	.494
第2因子	.539	1.000	.591
第3因子	.494	.591	1.000

<考察>

1. 見守り対象者

見守り対象者は後期高齢者が5割を超えており、身体の不自由な高齢者は2～3割を占め、一人暮らし高齢者世帯は全ての調査地域で最も高く、5.5割から8割を超えて占めていた。また、見守り専門職なしの地域では、見守り専門職ありの地域に比べ見守り対象高齢者の状況は、年齢・身体の不自由さ・一人暮らしの数ともに高かった。これより、専門職が配置されていない地域で見守り活動をしている住民ボランティアは専門職配置ありのボランティアより、見守り対象高齢者は独居者が多く、年齢も高く、かつ、より身体の不自由さを有する高齢者を見守り対象としていることが判る。

緊急連絡先は、全ての地域で「子」が1位であった。しかし農村部では「連絡先あり」が約3割と最も少なく、約6割が「わからない」、「無回答」で占められているのは、「高齢者を家族でみるのは当たり前」との価値意識の強さが現れているのではないだろうか。都市・近郊都市は「連絡先あり」が約5割を占めるが、都市部ほど「無回答」が多かった。しかし、専門職が配置されていない地域のS市では、緊急連絡先「無回答」が最も多く6割を占めることから、子や兄弟、親族からの孤立を窺わせ、地区内での意図的な交流事業等による近隣間の交流・関わりを深め、一人暮らし高齢者の孤立化を防ぐ必要がある。

2. 見守りチェックシート(案)の項目

今回の比較で、都市部でも、K市とS市では見守りチェックシート(案)の項目には回答内容に違いが見られた。都市部でもK市は、最も基本チェック項目の該当者が少なかった。

都市部では、「無気力又は生気がない」人の割合が高い傾向にあったが、これは、近隣住民・ボランティア等が身近な挨拶や声かけを通して見守り対象者と接していることが窺え、この様な状況把握につながったものと考え。地域内の普段からの見守り活動が出来ている成果が、うつ状態のスクリーニング項目である基本編8番(見守りチェックシート(案)(別添資料1))の把握につながるものと考え。

農村部では、隣の家との間隔が開いており、家の様子がわかりにくい状況になっていることから、「家の状況がわからない」と答えている割合が高い傾向にあると考えられる。このことから、該当者が0であった「不審者が出入り」の項目や「家や家周囲の散らかり」、「近所とのトラブルが多くなった」、「火の不始末が増えている」といった項目は、家の状況がわからないため、本見守りチェックシート案では、該当者が少ないもしくは「わからない」の回答者が多くなり、因子分析で基準値0.3に満たない削除項目としてあがってきたと考える。

S市では「通院している様子がない」と答えた割合、「食事が摂れていない」と答えた割合、うつ状態の人の割合が高かった。また、「会話が通じにくい」人の割合は、S市、都市近郊の順で高い傾向で、都市部では、「会話が通じにくい」ために、通院や食事摂取に支障をきたしている対象者が存在していることが考えられ、専門職の介入や福祉サービスの導入が必要であると考える。

今後の対応については、地域別では都市部ほど、所属地域における見守り専門職の有無別では見守り専門職なしの地域でサービス導入や専門職の介入が必要となる可能性がある見守り対象者を地域見守り組織メンバーが見守っていると考えられた。

所属地域における見守り専門職の有無別では、見守り専門職なしの地域で見守りチェックシート(案)(別添資料1)詳細編Aの「はい」に○がついた人の割合をみると、うつ状態項目の割合が高かったが、見守りチェックシート(案)(別添資料1)詳細編Cの認知症の項目では、見守り専門職有りの地域で認知症の項目の「はい」に○がつく人の割合が高かった。この理由の1つとしては、見守り専門職ありの地域では、見守り専門職が地域見守り組織メンバーに対し、認知症対応等の啓発をおこなっていることから、見守り専門職有りの地域の方が認知症の項目をよく観察しているためだと考えられる。

今回の見守りチェックシート(案)(別添資料1)では、基本チェック項目の「はい」に○がついている人に対して、詳細編をチェックすることとしている。しかし、一部の回答者は、基本チェックリスト項目の「はい」に1つも○がついていない人でも詳細編をチェックをしている人がみられた。このことは、見守りチェックシート案で該当項目はなくとも、詳細編の項目には、該当

項目があると判断したために追加でチェックをされていたと考える。

見守りチェックシート(案) (別添資料1) 基本編では、見守り対象者の家庭環境、認知症によって起こり得る項目が主に挙げられている。基本編の信頼性係数、CFIやRMSEAの値から、許容の範囲と考えられる。詳細編Aでは、基本編に加えて、対象者の動向把握や経済的状況、生活の詳細、人との交流が少ない高齢者が挙げられている。

見守りチェックシート(案) (別添資料1) 詳細編Bについては、生活機能評価項目の「うつ」状態を把握する内容である。認知症は、うつ状態と混同しやすい症状が出現することがあるため、「うつ」状態と区別できる項目は、必要であると考え。今回の見守りチェックシート案で「うつ」状態をチェックする項目(詳細編B項目)の信頼性係数は、第1因子 $\alpha=0.849$ 、第2因子 $\alpha=0.702$ であったが、5項目全体の信頼性係数は、 $\alpha=0.506$ であった。この原因としては、基本編8番「無気力又は無表情、意欲・生気なし」の該当者のみのチェック項目としたため、データ数31と少ないことが一因と考えられる。そのため、今後、さらにデータ数を増やす等検討する必要がある。

見守りチェックシート(案) (別添資料1) 詳細編Cに関しては、昨年度のアンケート結果、インタビュー結果を反映した内容となっており、信頼性係数の値やCFI、RMSEAの値から、許容範囲であると考え。

昨年のアンケート調査では、単身高齢者や高齢世帯で、「健康状態が良くない」、「認知症がある」、「経済的な問題がある」、「家庭環境の問題がある」等の高齢者の見守りが行われていた。また、人との交流の少ない高齢者について、孤独死の可能性があると考えている人の割合が高かった。

その結果から、見守りチェックリスト(案)の質問項目について、基本編のみでは、健康状態や認知症の度合い、経済的問題、家庭環境の問題を把握することは難しく、身体的・精神的な健康状態、経済状態、認知症の症状、家庭環境について偏りのない項目とする必要があると考える。因子分析の結果、削除となった項目の中で、生活に支障をきたすと考えられる「家や家の周囲が異常に散らかっている」や「ガス、暖房の消し忘れなど火の不始末が増えている」、人との交流を把握する「近所とのトラブル」は、把握する必要がある項目であると考え。また、経済状態を把握する「経済的に苦しい」については、年間所得が低い層ほど緊急時の支援者がいない一人暮らし高齢者の割合が高いとの報告があり¹⁾、見守り対象者の経済状態と緊急連絡先の有無について検討をしていく必要がある。そのため、見守り対象者の属性欄に経済状態に関する事項を追加した。

<まとめ>

今回の見守りチェックシート(案)集計結果から、次のことが判った。

○ 地域別見守り組織メンバーの見守り対象者と活動

1. 地域の別なく見守り対象者は後期高齢者が5割を超え、その内身体の不自由な高齢者は2～3割を占め、一人暮らし高齢者世帯は全ての調査地域で最も多く5割以上から8割を超える地域もあった。
2. 緊急連絡先は、全ての地域で「子」が1位であった。しかし、農村部では「連絡先あり」が約3割と少なく、「わからない」、「無回答」が約6割を占めるのは、インタビューなどを併せると「高齢者は家族でみるのが当たり前」の価値意識の現われともいえるが、回答なしが約6割の状況は親子関係の絆の希薄になりつつある様子を窺わせていた。

一方、都市・近郊都市は「緊急連絡先あり」が約5割を占めるが、都市部ほど「無回答」が多かった。

3. 過疎や限界集落等に近い農村部では、隣の家との間隔の広さ、遠さなどの状況に加えて、見守りボランティアの高齢化が進み、各戸を見廻れる状況にない現状「家の状況がわからない」の回答に反映されている。本年度から住民ボランティアに替わってIT見守りを導入した高知県大豊町のIT見守りネットワークに期待し、今後もIT見守りを一方策として見守り・検討したい。

○ 見守り専門職配置あり、なし別、見守り組織メンバーの活動

4. 見守り専門職が配置されていない地域で見守り活動をしている住民ボランティアは専門職配置ありの地域ボランティアより、見守り対象高齢者は一人暮らしが多く、年齢も高く、かつ、より身体の不自由さを有する、福祉サービス導入や専門職の介入が必要になる可能性の高い高齢者を見守り対象としていた。
5. 見守り専門職が配置されていない都市部の一人暮らし高齢者の「連絡先無回答」が6割の多さは、子や兄弟、親族からの孤立を窺わせる。地区内での意図的な交流事業等による近隣間の交流・関わりを深め、一人暮らし高齢者の孤立を防ぐ必要がある。
6. 見守り専門職ありの地域では、見守り専門職が地域見守り組織メンバーに対し、認知症対応の啓発活動を行っていたことから、認知症の詳細項目の該当者が明確・詳細な記載になっていた。これは日頃、機会をみて認知症研修を行っている成果と考える。
7. 見守り対象者の対応では、見守り専門職有りの地域では「普段どおり、挨拶や声かけ」の割合が見守り専門職なしの地域に比べ、有意に高かった。これは昨年の結果と同じではあったが、地域での見守り活動の基本として日常生活の中で挨拶や声かけができていないことは、見守り対象者の緊急時、早期発見、早期把握のために必要な土台であると考えられる。

○ 見守りチェックシート(案)の項目の検討

8. 見守りチェックシート(案)については、基本編、詳細編A、詳細編B、詳細編Cそれぞれに信頼性係数、比較適合度指標を求めた結果、基本編、詳細編A、詳細編Cに関しては、信頼性係数は許容の範囲であった。しかし、見守り組織メンバーが見守り経験の有無に関わらず健康状態や認知症、経済的問題、家庭環境の問題等について、偏りのない情報収集を行い、見守り対象者の状態を正確に把握でき、早期対応につなげるチェックリストとするためには、チェックリスト項目の選定、該当項目への対応のあり方をさらに詳細な分析・明確化作業が必要と考える。
9. 農村部などで「家の状況がわからない」とする回答のためか、詳細項目「不審者が出入り」、「家や家周囲の散らかり」、「近所とのトラブルが多くなった」、「火の不始末が増えている」など該当数0の項目は、因子分析で基準値0.3に満たない削除項目となったが、再度、検討見直したい。一応、今回使用の見守りチェックシート(案)を第3章のグループインタビューの結果も踏まえ来年度試行用の「22年度施行用見守りチェックシート案」を作成してみた(別添資料2、p61)。

第3章. 見守り組織の研修、グループインタビューの結果

1. 見守り組織研修プログラム（案）作成

<目的・方法>

○ 目的

- (1) 見守り組織メンバーに「高齢者等の見守り」の必要性を再認識してもらうための初期研修プログラムを作成し、これを用いた研修を住民ボランティア等に行い、見守り組織のあり方と、見守り組織の必要性を理解してもらう。
- (2) 「見守りチェックシート(案)」試行に向け、見守りボランティア組織メンバーに「見守りチェックシート(案)」使い方の説明会を行い、見守り組織メンバーの見守りすべき高齢者の判断基準と、そのために「見守りチェックシート(案)」の必要性を理解し・試用してもらう。

○ 方法

- 1) **対象**: 前年度アンケート調査に協力いただいた、各地区の見守り組織メンバー及び、関係する保健医療福祉職従事者を対象とした。人数は、H市16名、Se市33名、Ka市A地区12名、Ka市B地区13名、K市A区42名、K市B区33名、G村31名、S市92名、合計272名。
- 2) **時期**: 平成21年6月～平成21年12月の期間で研修を実施。
- 3) **研修内容と方法**: DVD『介護殺人: 防げなかった親子心中』を鑑賞後、グループワークを行い、以下2点について話し合う。また、話し合った内容を発表し、相互の意見交換を行う。
 - a. K被告(DVDでの提示事例)が周囲に助けを求められなかったのはなぜか
→(1、見守り組織が現実には機能してなかったが、なぜだろう)
 - b. K被告(同上)が、自分たちの隣人であったらどう対応できるか
→(2、自分たちの所属見守り組織内での出来事であったらどう対応できるか)
(研修内容と方法の詳細については、表1を参照)
- 4) **分析方法**: グループワークの発言を録音することに関し同意を得られた対象者には、ICレコーダーで録音したものから逐語録を作成。録音に同意を得られなかった対象者、もしくは録音した音声聞き取りにくい場合には、議事録をもとに発言内容をまとめる。
得られたデータは、テキストマイニングツールであるText Mining Studio3.1(数理システム)により分析を行なう。
- 5) **倫理的配慮**: 本研究は、甲南女子大学看護リハビリテーション学部研究倫理委員会の承認を得て実施している。研究対象者へ研究の主旨や匿名性に関すること、研究への参加は対象者の自由意志であり、不参加の場合に不利益を被るものではないこと、研究の途中でいつでも離脱できること、調査内容に関するプライバシーの保護を厳守すること、得られたデータは、本研究目的以外で使用しないことを明記した調査依頼文の配布および口頭での説明の上研究協力を依頼し、同意を得ている。

2. 初期研修プログラムの構成・内容

前年度から引き続き協力を得ている6市町村8組織の見守り組織メンバー272人に対して、2時間程度をめやすに、各地区の見守り組織メンバーの集まる昼又は夜間に表1に示す初期研修プログラムを用いた研修を実施。

・研修プログラム

- (1)講演:50～60分程度「高齢者介護と虐待問題・対処」などについて専門家の話
- (2)DVD鑑賞:15分『介護殺人、防げなかった親子心中』を鑑賞
- (3)グループワーク:DVD鑑賞後、グループワークで次のa,bの2点について話合う。また、話合った内容を発表し、相互の意見交換を通して参加住民ボランティアは、見守り組織のあり方と、見守り組織の必要性を改めて再認識する。
 - a. K被告(DVDでの提示事例)が周囲に助けを求められなかったのはなぜか
→(1、見守り組織が現実には機能してなかったが、なぜだろう)
 - b. K被告(同上)が、自分たちの隣人であったらどう対応できるか
→(2、自分たちの所属見守り組織内での出来事であったらどう対応できるか)

表1 研修内容・方法

時間	内容
10分	オリエンテーション
15分	DVD鑑賞「介護殺人:防げなかった親子心中」
10分	グループワーク「K被告が周囲に助けを求められなかったのはなぜか」
5分	討議内容発表
10分	グループワーク「K被告が自分たちの隣人であったらどう対応できるか」 <ul style="list-style-type: none"> ・ あなたが、K被告の隣人であった場合 ・ あなたが、見守りグループのメンバーであった場合
10分	討議内容発表

表2 DVD『介護殺人:防げなかった親子心中』の内容

父親の死後、10年以上にわたりK被告は工場働きながら母親の介護に努めていた。近所の人は、母親の手を引いて散歩する姿や、一緒に買い物する姿、おむつを抱えたK被告の姿をよく見かけていた。

ある日、母親が急に倒れ緊急入院後、認知症が進行し、退院後にも徘徊することが多くあり、K被告が仕事中にも「母を保護した」と警察から呼び出しを受けることがしばしばみられた。

しかし、近所の人はK被告が困っていることを知らなかった。K被告の母親は、地域の民生委員の支援対象に入っておらず、民生委員が関わることもなかった。介護保険サービスを利用しようにも経済的に困窮し、K被告は母の介護で一睡もできない日が続いた。

ついに介護に追われるK被告は、仕事を続けられなくなったが、生活保護の申請に対しても十分な対応をしてもらえず、生活苦に加え、「(生活保護の)申請ができない」との思いもあり、母親との心中を決心した。

「NHK クローズアップ現代防げなかった悲劇:2006年6月28日放送」より

<結果>

1、見守り組織が現実には機能してなかったが(a. DVD 提示事例のK 被告が周囲に助けを求められなかった)、なぜだろう

1) 見守り組織参加メンバー全体の意見傾向

グループワークにおいて、頻出している単語には「行く」「男性」「役所」「自分」「近所」が挙げられる(図1)。

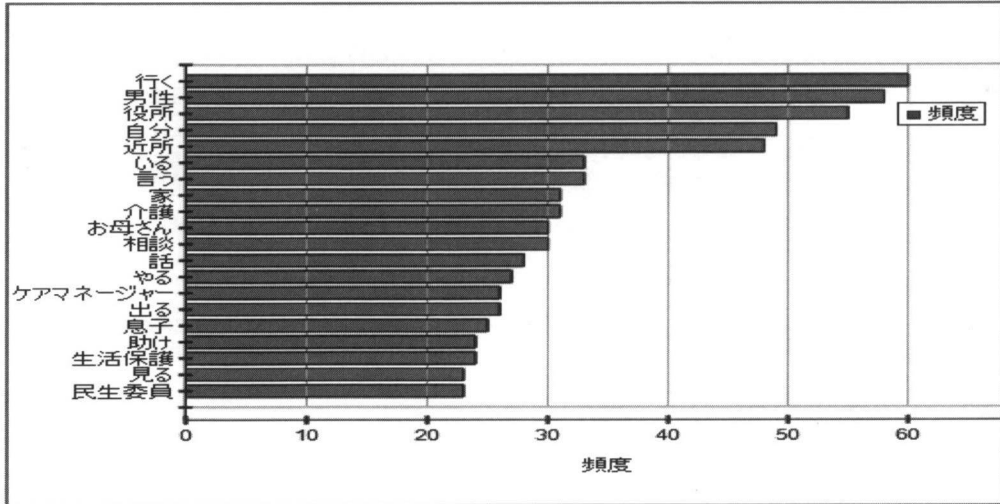


図1 単語頻度解析 (n=272)

頻出している単語に関し、評判抽出を行なったところ、Negativeな意味で使用されている頻度が高いのは「男性」「役所」「近所」であった(図2)。

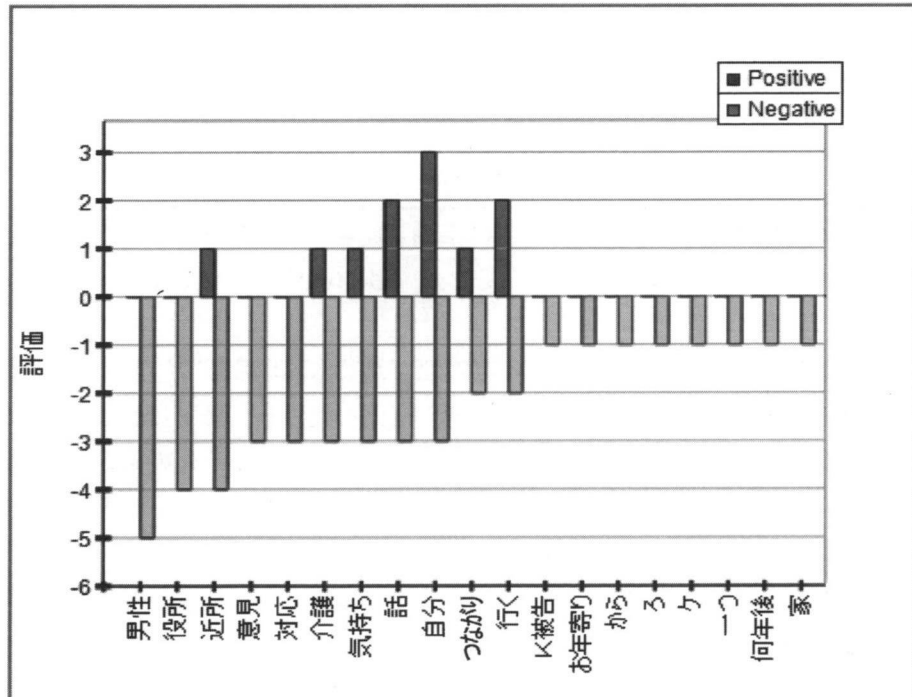


図2 評判抽出

まず、「男性」に対しては、どのような意見が出されているのか係り受け頻度解析を行ったところ、「男性は言えない」「男性は難しい」という係り受けが多くみられた(図3)。

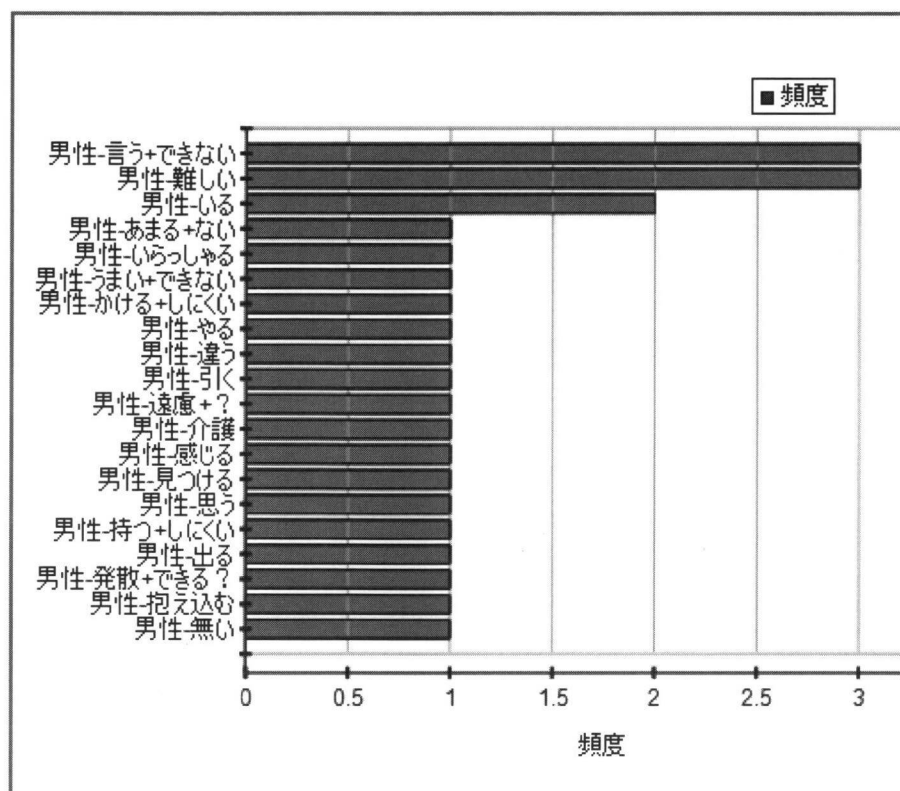


図3 「男性」に対する意見(n=272)

これら2つの係り受けに該当する代表的な意見をまとめた(表3)。

これら以外でも「男性には、やはり声がかげづらい」「女性ならいいけど、男性が相手だと引いてしまって、踏み込めない」「男性には遠慮があるのかな」「男性だと、近所とのつながりが持ちにくい」「近所づきあいがないのでは?」「男性では、介護の苦勞を発散できなかったのではないかな」等、「男性は言えない」「男性は難しい」につながる内容がみられている。

表3 「男性」に係る対象者の意見

男性は言えない(男性+言う+できない)

母が認知症で困ってるというのは、男性は言えないから…

男性はプライドがあるから言えなかったのかも知れない。

男性の方は、なかなか人には言えない。

男性は難しい(男性+難しい)

介護者が女性だったら声をかけたりできるけど、男性だったから難しかったのかなという気がした。

なかなか男性は難しいのかなと思うのです。

男性はひとこと言い出すのが難しいんですよ。

次に「役所」に対して、対象者がどのようなイメージを抱いているか、係り受け頻度解析を行った(図4)。「怠慢」「役所が悪いのではないか」「問題がある」と捉えられており、具体的な意見としては、「生活保護などについて説明不足」「役所も家に訪問するなどして、実態を知ることができたはず」「役所は事務的」といった意見もみられている。

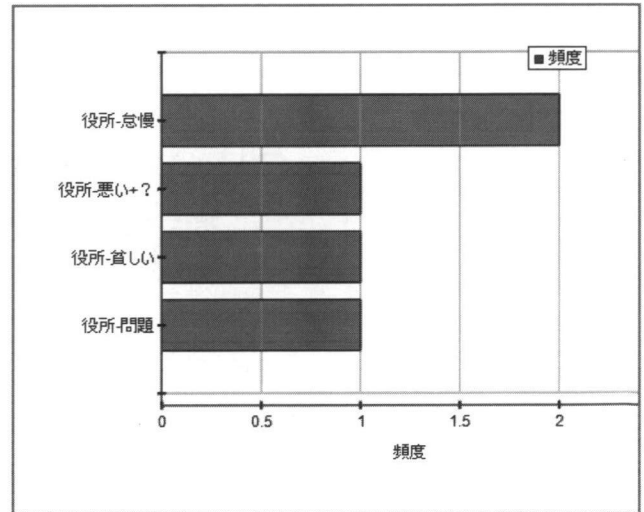


図4 「役所」に対するイメージ(n=272)

「近所」についても同様に係り受け解析を行った(図5)。「近所付き合いがない」ことが多く挙げられている他、「近所に言えない」「近所付き合いがそんなにない」など、近隣者との付き合い・関わりについての希薄さに関して類似した意見は多い。近所付き合いに関する代表的な意見を、3にまとめた。

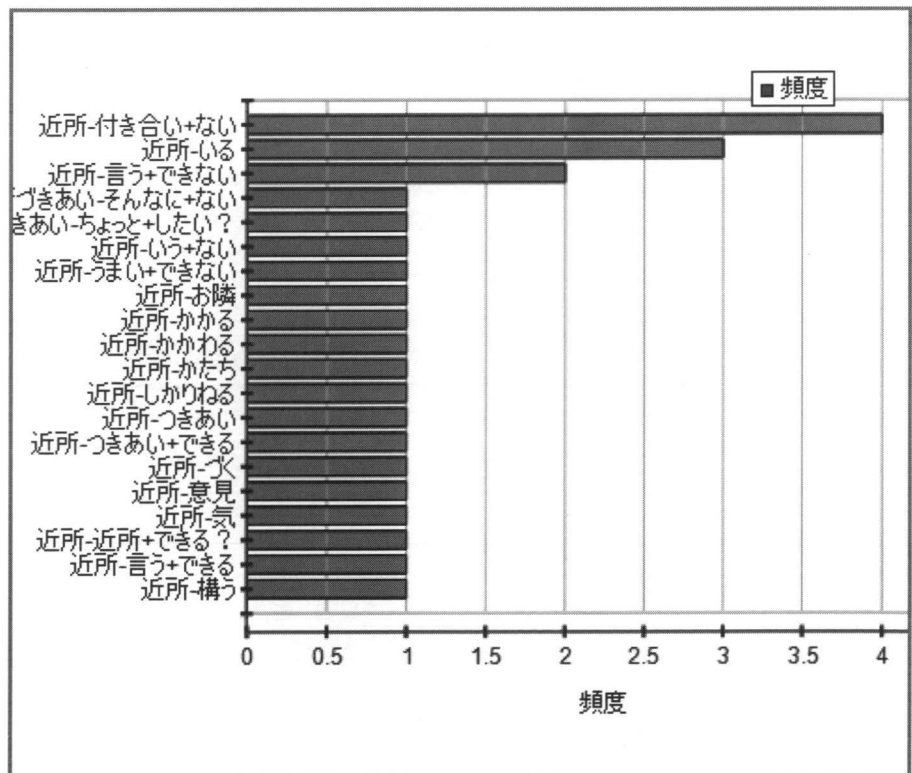


図5 「近所」と同時に使用されている言葉(n=272)

表4 近所付き合いに関する対象者の意見

近所付き合いがない(近所+付き合い+ない)

一人息子だったし、仕事に行ってるから近所付き合いがなかったのかも知れない。

日ごろから近所との付き合いがなかったんでしょうかね。

男性であり、近所との付き合いがなかった。

(都市部は)近所との付き合いはないし、よそからの集まりだし。

近所付き合いがそんなにない(近所付き合い-そんなに+ない)

男性の方なので、ご近所付き合いもそんなにないやろうということで…

近所付き合いちよっとしたらよかった？(近所付き合い-ちよっと+したい？)

普段からのご近所付き合い、お母さんの付き合いを通じて、もうちよっとしていただけたら良かったのかなと思いました。

近所とうまくできない(近所-うまい+できない)

近所付き合いがうまくできていなかったのかなというところもありました。

近所のかかわり(近所+かかわる)

奥さんがおられたら、その奥さんが近所とかかわるのでしょうけど、男の人ではなかなかできないのでしょうね。

近所つきあい(近所+つきあい)

主婦であればご近所とのつきあいもあるだろうけれど、男性だから仕事しているし、お母さんが認知症になる前から、近所付き合いは少なかつたんじゃないかと思う。

近所付き合いの希薄さの要因として、「介護者が男性であること」を挙げている者が多く、その他には「都会」が挙げられている。

以上から、K 被告が周囲に助けを求められなかった理由としては、次の①～③が挙げられる。

- ①介護者が男性であるための難しさ:男性は、周囲に介護負担などを訴えにくい・周囲からの関わりが持ちにくい
- ②近隣との付き合いの希薄さ:特に男性では近所付き合いが希薄な傾向があるのではないか
- ③行政(市役所)の対応の不十分さ

2) 各地区別にみた見守り組織参加メンバーの特徴

各地区に関して、特徴語抽出を行なった(図6～図13)。

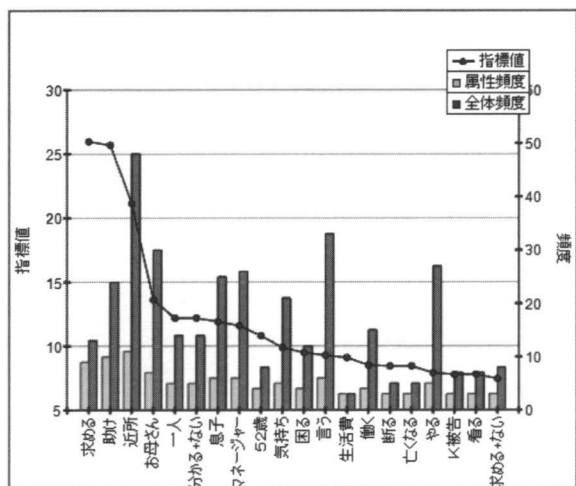


図6 特徴語抽出(H市)n=16

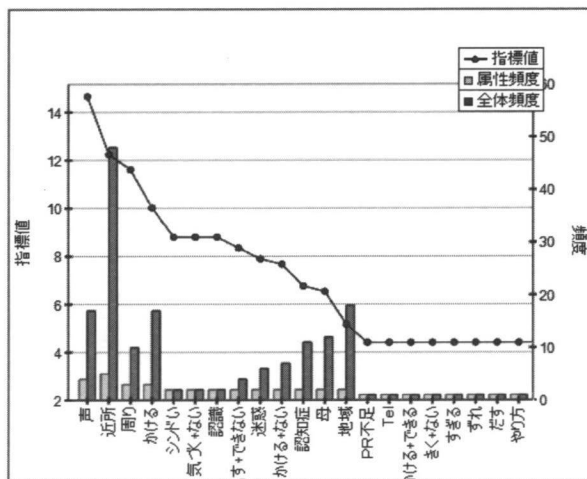


図7 特徴語抽出(S市)n=92

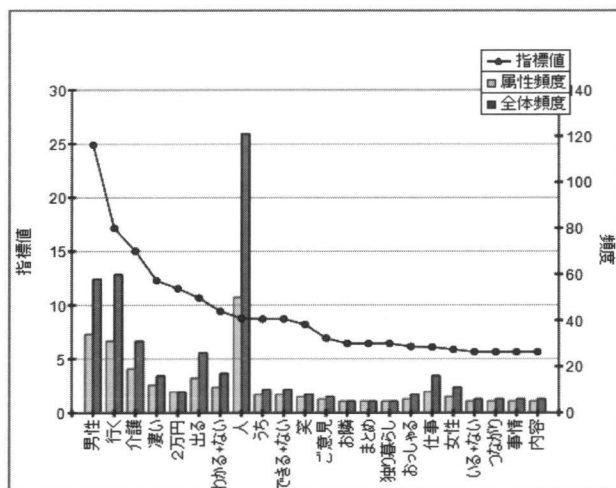


図8 特徴語抽出(Se市)n=33

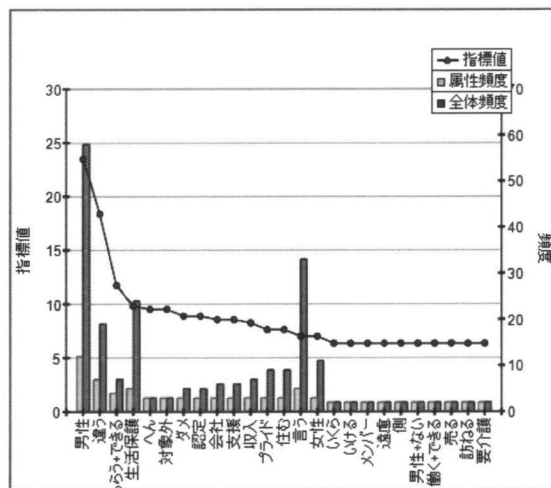


図9 特徴語抽出(K市B区)n=33

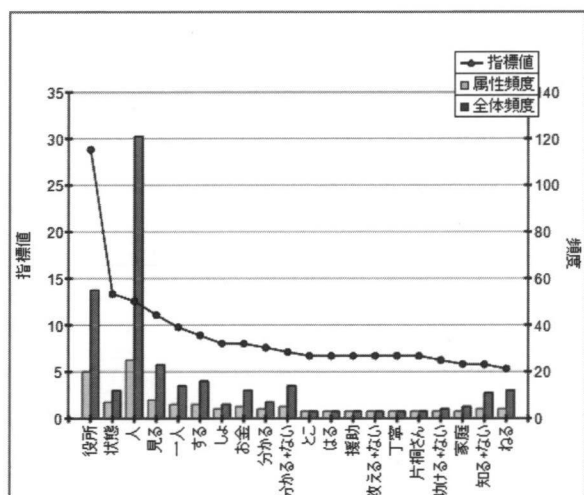


図10 特徴語抽出(K市A区)n=42

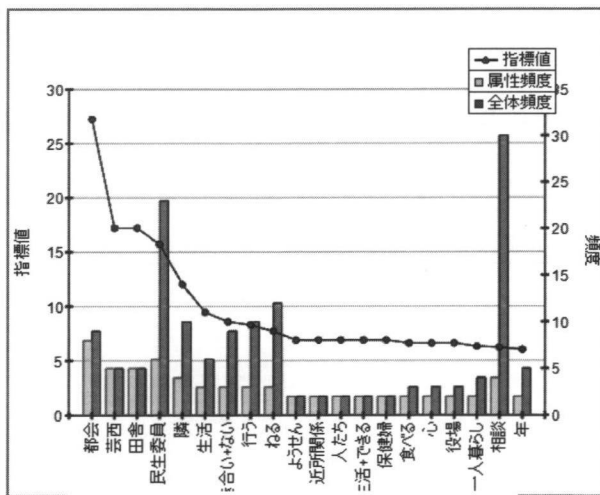


図11 特徴語抽出(G村)n=31